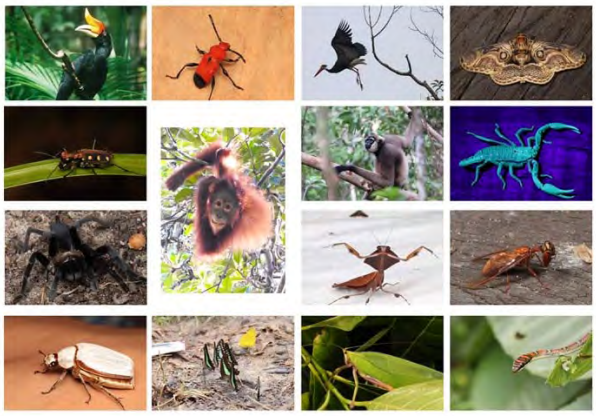
「ボルネオの熱帯林破壊と私たちの消費生活とのつながり」

地表の数%を占めるにすぎない熱帯林には地球上の生物種の半数以上が存在しています。日本から最も近い熱帯林が広がるボルネオ島は生物多様性の宝庫として有名で、オランウータンやテングザルなどの類人猿を始め、空を飛ぶトカゲやヘビやカエルなど樹冠層で生きる爬虫類や両生類、世界中に愛好家を持つユニークな鳥類、擬態する昆虫、しめ殺しの木、独特の形態をした寄生植物や食虫植物、光る菌類などが、生態系の中で数万年以上の時を経て互いに関係しあって変化しながら進化し、生き延びてきました。

しかし、世界中の熱帯林は、大規模農業、牧畜、造林、鉱山開発など人為的な影響により破壊され、国連が数十年で 100 万種の生き物が絶滅する可能性があると指摘するなど、生態系が危機的な状況にあります。また、開発に伴う森林火災では 10 数億トン以上もの温室効果ガスが排出され、気候変動への影響も大きなものとなっています。

一方、移民政策などによる人口流入や近代化が進むボルネオ島では、学業や仕事のための現金収入も当たり前に必要となっており、アブラヤシ開発などによる定期的な収入を望む地域住民も増えています。ここにしかない豊かな自然と人々の暮らしを両立するための持続可能な社会のあり方が問われており、NGO は、苗づくり・植林、森林農法、エコツーリズムなど自然を破壊しない収入向上のあり方を模索しています。

熱帯林破壊の原因は経済的に豊かな生活を求める私たちの消費生活にあります。特にボルネオ島熱帯林破壊の最大の原因はアブラヤシから採れるパーム油という植物油脂であり、その需要はライフスタイルの変化とともに拡大してきました。熱帯林保全・保護は私たちの消費生活をどのように変えるかと密接につながっているのです。



石崎雄一郎（ウータン・森と生活を考える会　事務局長）

地球サミットが開催された 1992 年、小学校だった時に熱帯林破壊のニュースに恐怖を感じる。ボルネオ島の村人と NGO が森林再生に取り組む姿に感銘を受け、在来種の苗づくり・植林やエコツアーなどを実施してきた。熱帯林破壊を止めるため、開発で殺されたオランウータンの調査、インドネシア政治家への署名の手渡し、日本企業の株主総会で「パーム油発電反対アクション」なども行なっている。2020 年から熱帯林と食の関係を考慮して、ヴィーガン生活を始める。